

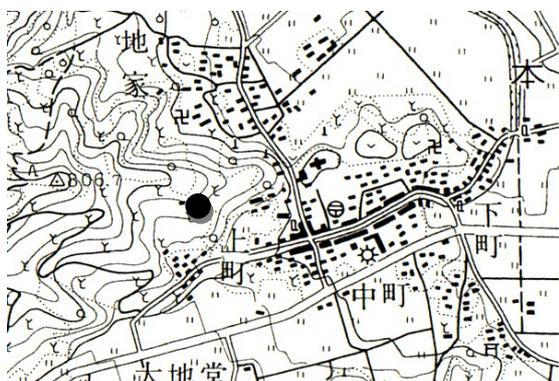
# かぶとやまいせき 兜山遺跡 現地説明会資料

（財）長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター

## 1 確認された古墳

兜山遺跡は千曲川左岸、佐久市大沢に所在し、八ヶ岳連峰の北端から東に延びる丘陵の南斜面に立地しています。

遺跡の一角、標高736m付近に6×3mほどの石積みがありました。2008・2011年に実施した確認調査（トレンチ調査）により、この石積みが、墳丘を失った古墳の横穴式石室である可能性が高まり、本年度、本格的な発掘調査に着手しました。その結果、横穴式石室をもつ古墳の存在が明確になりました。



古墳の位置



調査前の石室（東から）

## 2 調査の概要

### 横穴式石室の構造

本古墳の横穴式石室は、天井が崩れ落ち、側壁もかなりの部分が失われていましたが、発掘調査により石室の構造が明らかになってきました。

南に出入り口を設けた石室は、側壁から内側に張り出すように立てた門状の石（立柱石）によって、石室内の空間を玄室（遺体を安置する部屋）と羨道（玄室と外部を結ぶ通路）とに分け



石室（南から）



裏込め（北西から）

る構造です。玄室は長さ 2.3m、幅 1.3mを測り、高さは最大 1.1m残存しています。玄室の床にはやや大ぶりの石が敷かれた後、5 cm程度の大きさの礫が敷き詰められています。羨道は西側壁が長さ 1.6m残存しており、幅は、東側壁が失われているため明確でないものの、玄室とほぼ同じかやや狭いと推測されます。奥壁～側壁石の外側には小振りの石をぎっしりと詰めています（裏込め）。

### 出土遺物

石室からは鉄鏃<sup>てつぞく</sup>、土師器<sup>はじきつき</sup>坏・椀<sup>わん</sup>、青磁碗片、人骨が出土しています。鉄鏃は 8 世紀のものと思われ、古墳築造時の副葬品である可能性が高いと考えられます。土師器は平安時代、青磁は中世のものです。人骨については、その一部ですが放射性炭素年代測定を行ったところ、13～14 世紀に相当する測定値が出ました。これらは後世の石室再利用に伴うとみてよいでしょう。



鉄鏃の出土状態（長さ 8cm）

### 築造年代

佐久地域では、横穴式石室をもつ古墳の築造は 6 世紀後半（古墳時代後期）に始まり、8 世紀（奈良時代）まで続きます。横穴式石室や鉄鏃の特徴から、本古墳は 8 世紀に築かれたと考えています。

### 後世における石室の再利用

石室内から出土した土師器坏・椀は平安時代（10 世紀頃）、青磁碗は鎌倉時代（13 世紀）のものであり、人骨は鎌倉時代ないし室町時代に属する可能性があります。いずれも古墳の築造年代との間に大きな隔たりがあります。これらを古墳築造から連続する埋葬（追葬）の痕跡とみなすよりも、平安時代と中世に、埋葬などの場として再利用されたと捉える方が実態に即しているのではないのでしょうか。周辺古墳を含め、横穴式石室の再利用のあり方を追究することも今後の課題です。



土器の出土状態



人骨の出土状態

### おわりに

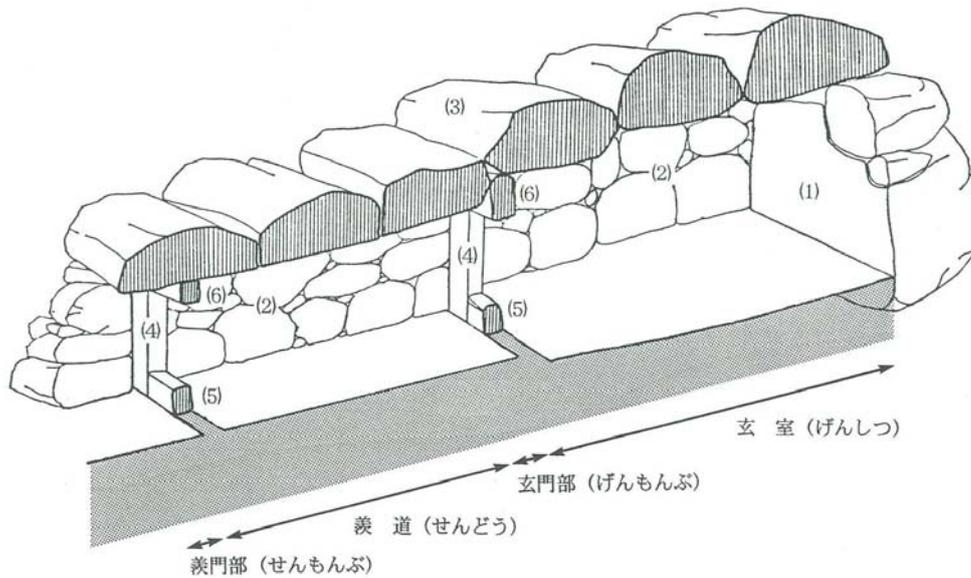
本古墳がある千曲川左岸は古墳の発掘調査例が少ない地域であり、今回得られた資料は、この地域の古墳時代～中世の歴史を考える上で貴重なものとなるでしょう。

なお、本古墳は中部横断自動車道用地と民有地にまたがっています。最後になりましたが、発掘調査をご承諾いただいた土地所有者の方々に感謝申し上げます。

# 石室全景写真



## 横穴式石室の名称と部位



### ● 横穴式石室

- (1) 奥壁 (おくへき、鏡石)
- (2) 側壁 (そくへき)
- (3) 天井石 (てんじょういし)
- (4) 袖石 (そでいし、立柱石)
- (5) 框石 (かまちいし、しきみいし)、  
闕石 (しきみいし)
- (6) 楣石 (まぐさいし)

出典：『長野県考古学会平成8年度秋季大会』資料からの転載